

鳥海山(2236m)・霧の山稜の旅

梅雨明け直後の一等三角点(補点)鳥海山へ

2012年(平成24年)7月26日に「梅雨は明けた模様」と山形地方気象台から梅雨明け宣言が出された。私達はこの日を待っていて、鳥海山への登山を7月28日に決行することにした。

鳥海山は、東北地方では福島県南会津のひうちがたけ燧ヶ岳(2356m)に次ぐ第2の高峰であり、『日本百名山』(深田久弥著)の山としても有名である。

気象台から「梅雨明け」が発表されたが、その後も新庄から眺める鳥海山の山頂から、雲が取れる日はなかった。

この日は、ダイスケ君と2人の登山で都合がつけば彼の弟も同行するかもしれない、ということになっていた。遊佐町内の国道7号沿いの「コンビニ」を集合場所にしていて。そこで一足早く到着したダイスケ兄弟とAm5:30に合流した。



当日も厚い雲に隠された鳥海山(遊佐町北目)

登山計画書を投函して、いざ入山！！

今回の登山は秋田県ほこたてぐち銚立口から入山し、下山は山形県吹浦口を予定している。そのため車一台を吹浦口の駐車場に置いて、そこからもう一台の車で銚立口まで移動した。登山シーズン到来を思わせるかの様に、すでに駐車場は満杯であった。道路側溝を跨いだ空きスペースを見つけた。コンクリート水路をまた跨いで車を乗入れ、何とか駐車することが出来た。

早速、身支度を調べ、銚立の登山口に立った。周囲は深いガス濃霧に包まれ視界が効かない。「梅雨明けになったんだから、濃霧も昼頃にはあがるんじゃないかな。」との楽観的な期待をいだ抱いていた。まだ無人の「登山案内所」のポストに「登山計画書」を投函しAm6:30に出発した。

「展望台」まではコンクリート舗装の道が続き、「展望台」からの平坦部は木道もく道どうに変わった。そして、その木道が終わり、いよいよ荒々しい岩の山道を登り詰めていくことになった。

太陽の光が濃霧に遮られた登山道をゆっくりと歩く。霧が流れてかんぼく灌木の枝を揺らしていく。周囲の景色は霧の中に消え小鳥のさえず囀りも聞こえて来ない。静寂な山道を、私達は無言のまま歩を進めていった。早々、この濃霧が突然に晴れてくれることを念ずるのみである。



最初だけ、「展望台」への舗装道がつづく・・・

「黄色い花が咲いてるぞォ～ッ」

登山道の秋田・山形の県境付近が、鉾立登山口と賽の河原^{さいのかわら}のほぼ中間地点となる。しかし山形県側に入っても霧は晴れるどころか、益々濃くなったようで、賽の河原に着く頃には数メートルの視界しか効かなくなっていた。入山から1時間弱、さほど汗を掻かずに賽の河原に到着した。ここで小休憩することにした。

「黄色い花が咲いてるぞォ～ッ」と霧の中からダイスケ弟の声が聞こえた。その声に目を凝らして探すと霧の中に「ニッコウキスゲ」の花が確認できた。



霧の中に立つ「賽の河原」の道標・・・



紫煙を燻らす至福のひとつ・・・



御浜小屋への道を閉ざす濃霧・・・

「賽の河原」から「御浜小屋」へ

ほんの少しの休憩の間に、霧が更に濃さを増したような気がした。まるで夕方のような薄暗さを感じ取った。登山道の雪渓は消えていた。その雪の消え際からは「チングルマ」の真白い花が咲き誇り、そして霧に揺れていた。

ザックを背負い、歩き出した。数メートル先しか視界が効かない。地形図で登山道を確認した。「河原宿コース」に入り込まないように、登山靴が踏みしめた岩の「跡」を目で拾って歩く。ほどなくして登りになった。標高1700mの「御浜小屋」までは約150mの高低差がある。その歩道は階段続きであった筈だが、現在その階段は取り払われて石畳状の道になっていた。それが自分の歩幅で登ることができ、快適な登山道になっていた。



チングルマ（稚児車/ユリ科）の群落

「御浜小屋」でひとやすみ・・・

「御浜小屋」には予定より30分早いAm8:00に到着した。濃霧^{ガス}の中の歩行が、逆に梅雨明けの太陽光線を背中や後頭部に浴びずに済んだ。それが幸いし、3人共軽快に歩けた。「蔵王のお釜」にも似た「鳥海湖」の北峰に建つ「御浜小屋」には、濃霧を伴った強風が吹き付けていた。

私達はその「御浜小屋」を風除けにし、石垣に腰を下ろしてひと休みした。小屋の売店の扉も悪天候のため閉め切られている。脇には「売店メニュー」が掲げられている。「鳥海山氷河水」(500円って、何!?. どんな、ミス!?.)手元の気温で20。ここまでさほど汗も掻いていないし、好奇心はあるものの、売店の扉を叩いて、それを買い求める勇気が私達にはなかった。



地形図を確認：御浜小屋は登山口と山頂との中間地点!!



標高も高いが、値段も高い!!

「御浜小屋」から「七五三掛」 --- 濃霧と強風の山稜を歩く ---

何の景色も望めない天候に、すぐに先を急ぐことにした。小屋の裏手の稜線にでた。鳥海湖から吹き上げる風が濃霧^{ガス}と共に顔面を叩きつける。その凄まじさに仰天!!。再び小屋陰に戻った。そして、ザックからカッパを取り出して着用した。そうするよう、ダイスケ兄弟にも勧めた。

気を取り戻して再び稜線にでた。風は呼吸するかのよう強弱を持って吹き上げてくるが、止むことはなかった。御浜小屋から扇子森(1759m)へは溶岩礫が広がる幅広い稜線となり、そこから御田ヶ原分岐に下降する道順になる。小屋を発ってすぐに、登山道は幅広い稜線が災いして散らばってしまった。登山道の形跡を探し、濃霧^{ガス}と共に吹き付ける風に、顔を背けて歩いた。扇子森ピークに達して振り返ると、「兄」はTシャツの半袖のままである。兄弟に「カッパはあるのか」と確認し、その場でカッパを着用してもらった。カッパを着ていた私(筆者)でさえ、カッパ越しに風の冷たさが感じられた。通常、風速1mで体感温度が1下がると云われている。それが気温20と強風の環境下で、放置していればどんな結果になるか容易に想像できた。

視界が2mもないような状況で、扇子森から南の鳥海湖の方向に踵^{きびす}を向けた。時折、小石が飛んでくる中を進んでいく。そして「トラロープ」が張られた場所に到達した。今度はそれを頼りに御田ヶ原分岐の方向に進むと、次第に道跡がハッキリし、本来の登山道に合流した。

計画では、この先、鳥海山の外輪である文珠岳(2005m)、行者岳(2159m)を経て山頂を目指す予定であったが、この強風には素直に断念した。七五三掛から外輪の内側の「千蛇谷」を経て山頂を目指すことにした。今回の場合は、それがより安全なルートであることは明白である。

千蛇谷コースに下りる

およそ1時間弱で「七五三掛」に到着した。時刻はAm9:00になっていた。

ここは外輪コースと千蛇谷コースの分岐点でもある。私達は当初のルートに替えて、千蛇谷へと下りることにした。

すぐ裏が外輪の崖地で「金バシゴ」を伝って急降下した。ここでは風はなく、体も温もりを感じるほどであった。ただ、千蛇谷の雪渓の雪解の熱で、霧は深いままである。濃霧の中を進むにつれて、次第に賑やかな声が聞こえてきた。



雪渓際にツアー登山ご一行の姿があった

百名山ツアー客のご一行

外輪の裾のやや平坦な道を下りていくと千蛇谷の雪渓に達した。賑やかな声の主は団体客の一団であった。雪渓を渡る前に休憩をしながらの談笑が、霧の千蛇谷に響いて聞こえていたのである。

「こんにちワァ」と山の挨拶をして聞いてみると、静岡から観光バスで「日本百名山」の山である鳥海山登山にきたと言う。私達は、そんな団体ご一行様を追い越して雪渓に足を踏み入れた。堅く引き締まった雪で、傍らには外輪から落ちてきた頭部ほどの岩石が散乱していた。



千蛇谷を埋め尽くす 雪渓を横切る

ついに、突然、濃霧が晴れた！！

雪渓を渡り、草原の中に延びる登山道を登り上がる。標高1870m付近まで来た時、周囲が「パァッ」と明るくなった。それまで濃霧に隠されていた外輪がその正体を現わしたのである。「オオ-ッ!!」とどよめきの声があがった。「鳥海山」が姿を現わしたのである。兄弟にとっては初めての鳥海山が、このまま濃霧の山に登り、濃霧の山を下るのかとの心配は去り、心騒ぐ思いである。そして濃霧は、だんだん薄れていくように思えた。



濃霧の中から現れた雪渓の白さが眩しい!?

人・人・人の御室直下の登山道

山頂に近づくとつれ、霧が薄れてきた。その分、視野も広がってくる。濃霧^{ガス}の中で見えなかったものが、次々と見えてきた。そして意外にも登山者の多いことを知らされた。休憩^とを解いてまた登り始めようとしている集団があった。話し掛けてみると、横浜からきた30人程の中高年のツアー客であった。話しを伺った方は、なんと、山形県の村山市出身で、ご両親は共に大石田町出身とのこと。「鳥海山の後は、月山に登るんだア」と云っておられた。かの『日本百名山』をターゲットに山行を楽しんでいる、と云う強者^{つわもの}である。私達は、急ぐ山旅でもないので、登山道いっぱい^{おおものいみ}に延びた列の後部につき、鳥海山^{おおものいみ}大物忌神社のある御室をめざしての随行となった。

御室の手前で、下山する一行とすれ違った。その中のご婦人が、「新山の巨岩^{いわ}には、とても感動した。是非、新山に登って見てッ」との「アドバイス」の声を残して下山して行った。



ツアー客の列の最後部について登る



とうとう、最高峰「新山」の姿が望めた

ついに「鳥海山」に到達する！！

午前10:50、ついに神社のある御室に到達した。時折、外輪を超えて流れ落ちる濃霧^{ガス}に、景色が消えるものの天候は明らかに回復傾向にあった。ダイスケ兄弟にとっての初めての「鳥海山」を今、体験することになる。が、「鳥海山」と云う山頂は「蔵王山」と同じように存在しない。一等三角点のあるのが「七高山」（2229m）で、最高峰が「新山」（2236m）であり、それら山群の総称が「鳥海山」と云うことになる。私達は今、その「鳥海山」のど真ん中に立っている。

登頂時間の実績^{かえり}を顧み、吹浦口下山の時刻は変えないことにして、予定より30分遅く、Pm1:30に下山時刻を設定した。折角晴れてきた山頂を、時間をかけて十分に堪能^{たんのう}することにしたのである。

単独で登ってきたという秋田市在住のご婦人は、「去年も来たけど、天候が悪くて何も見えなかった。」「今日は晴れてきて良かったワ」「新山には登られるんですか!？」と言うから、「これから登ります。」と返答した。



御室の小屋は宿泊客でこった返していた

鳥海山の最高峰「新山」を探访する・・・

御室から新山には約 20 分程で到達可能である。噴火で出来た溶岩ドームの岩山で、巨岩が重なりあって形成されている。その巨岩の隙間に落ちないように慎重に足場を選んでの登頂を強いられることとなった。そのころから山頂の上空には青空が広がった。改めて周囲を見渡すと何処から人が湧いて来たのか凄い数の登山者である。「新山」は登山ラッシュになっていたのだ。



御室から巨岩を乗り越えて、ひと休み・・・



溶岩ドームを潜りぬけて・・・ひと安心・・・



「新山」から鳥海山外輪を望む



日本海の眺望に、「ガッツ」だぜッ!!



最高峰「新山」です・・・証拠写真の順番を待つ・・・



落石注意!!、慎重に「胎内岩」くぐり

贅沢な、「雪渓を食卓」にしての昼食です。

新山頂上から胎内岩を潜り抜けて雪渓にでた。北側の秋田県にかほ市方面だけ眺望が広がり、その奥には日本海が見て取れた。時間は Pm0:30 を過ぎていた。ここで昼食を摂ることにした。



新山直下で、食事場所を物色すると・・・



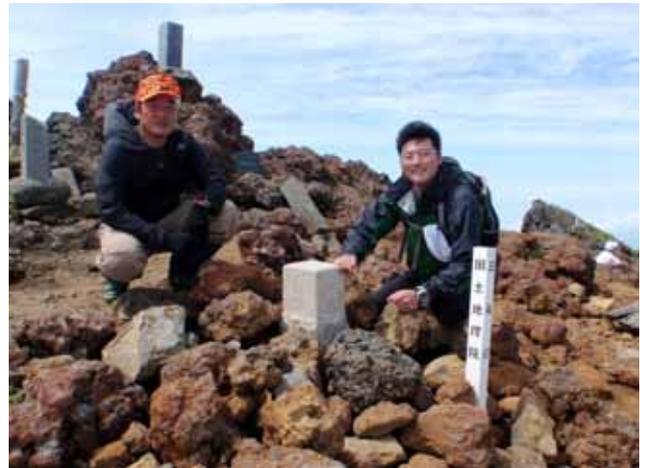
岩と雪渓の間に足を入れ、雪渓が食卓に変身!?

「新山」から一等三角点「七高山」を経て、御室へ戻る

新山からは雪渓をくだり、岩をよじ登って外輪にでた。すぐに一等三角点「七高山」に到達した。山頂をのんびり闊歩^{かつぽ}し、見える限りの風景を脳裏に納めた。そして、御室に戻り Pm1:35 に下山を開始した。すると舞台の幕が降りる様に、山頂はまた深い濃霧^{ガス}の中に消えてしまった。



風雪で固められた雪渓を慎重にくだり



これぞ「一等三角点七高山」の証拠写真!!



外輪と新山の間には稲倉岳 (1554m) が望める



秋田県「矢島口」方向を眼下に見わたす

たかね
鳥海山「高嶺の花」との出会い !?



チョウカイフスマ (鳥海衾/ナデシコ科)



ウゴアザミ (羽後薊/キク科)



ニッコウキスゲ (日光黄菅/ユリ科)



ハクサンシャクナゲ (白山石楠花/ツツジ科)



ヨツバシオガマ (四葉塩竈/ゴマノハグサ科)



イワカガミ (岩鏡/イワウメ科)



ウサギキク (兎菊/キク科)



ハクサンフウロ (白山風露/フウロソウ科)

鳥海山から下山して

鳥海山登山から帰り、数日が過ぎた。しかし、新庄から眺める鳥海山の山頂はいつも厚い雲の中にあった。2012年7月26日に「梅雨明け」が宣言されて以降、鳥海山の山頂が眺められたのは8月3日だけでその後はまた厚い雲で隠された。



鳥海山千蛇谷から山頂へ向かう、横浜からの団体サン

事故が相次ぐ鳥海山登山・・・

私達が登山した日も、山頂の気温は22しかなかった。（同じ日の酒田の最高気温は31、山形では35.1だった。）そんな雲に隠された鳥海山から、新聞等で救急や事故のニュースが相次いで伝えられた。

今や空前の「登山ブーム」。特に元気な中高年には、「日本百名山」や「一等三角点」の山に人気が集まる。両方の要件を満たす山形県の鳥海山や月山は人気が高く、関東や関西方面からは勿論、全国から多くの愛好者が、個人、団体を問わず訪れている。

新聞記事にみる 2012年（平成24年）の鳥海山登山での事故遭難

発生日時	事故等の状況と原因	対象者	救助形態
7/29 Pm0:15	賽の河原で転倒。左足首骨折。	仙台市、64歳（男）	消防救助。救急車搬送。
7/30 Am0:15	PTA行事で登山。山頂御室小屋で体調崩す。（高山病）	遊佐町、45歳（女）	ヘリコプターで鉦立。救急車搬送。
7/31 Am10:05	8合目千蛇谷付近で体調を崩して動けない。（高山病）	南陽市、61歳（女）	ヘリコプターで搬送。
7/31 Pm 3:25	5合目滝の小屋で足が痙攣（けいれん）して動けない。	船橋市、68歳（男）	ヘリコプターで搬送。
8/6 Am 7:15	8合目千蛇谷付近で転倒し、右手首骨折。	東大阪市、65歳（女）	濃霧ヘリコプター不可。消防介助、自力下山
8/7 Am11:50	山頂付近で石につまづき転倒。左足骨折。	千葉県富里市 71歳（男）	秋田県矢島口から、消防救助。
8/7 Pm 7:45	鉦立から入山。山頂からの帰り誤って湯の台コースへ。遭難。	由利本荘市 63歳（男）	山形県湯の台から、警察署員が発見、救助。
8/8 Am 9:15	約20人のツアー。七五三掛付近の岩場で転倒。足首捻挫。	川越市 68歳（女）	秋田県鉦立から、消防救助。

安全・安心な登山を楽しむために・・・

鳥海山での2012年の救助件数は11件11名（8/10現在）との報道がされていた。2011年が4件、2010年が6件とのことだから、異常発生とも云える。表にした上記の「状況と原因」を反面教師として、安全で（一寸スリルがあって）自然を存分に楽しむ「一等三角点」の山旅を、私達は継続して行きたいものと思っている。



山形県吹浦口

17:40に無事、吹浦口で下山 したぞォ!!